

私は議案 77 号に賛成する立場で討論させていただきます。

この間、私もさわらび祭に行ってみりました。子どもたちが生き生きと自分の意見をしっかり述べていました。この学校って、本当に一人ひとりの力を引き出すそういう学校なんだ、大きな学校では影に隠れてしまうかもしれない、なかなか表に出ることができない、かもしれない、そんな子どもたちが一人ひとりが主役になって、力を合わせて、本当にキラキラと輝いていました。今、少人数の学校ではこれからの将来を担う子どもたちは育たない、少人数の学校を否定するような意見が続きましたけれども、私は逆だと本当に思いました。

そして、今、世界的な雑誌 TIME にも載ったという、この河合谷小学校、何とかして存続できるように、私たち大人が本当に知恵を出し合って、今立ち止まらなかつたら本当に消えていく。何とか残すように。たしかにもう古くなった学校、耐震のこととかいろいろ問題は抱えています。でも、一つ一つの問題をみんなが知恵を結集すればできることが必ずあると、私は思います。

今日の議会全員協議会でいろいろな意見、考えをお聞きしながら、どうしたら議員のおひとりお一人に呼び掛けることができるかと、今もなお、諦めないで考えています。もう決まったことだから、それはもう 3 月の議会で決まったことだから、みなし不採択にもなったんだから、と、そうではなくて、今立ち止まらなかつたら本当に将来に禍根を残すと私は思います。

いったい、ここまでの大きな問題に発展した大きな原因は何か。私はやっぱり、最初の段階で、教育委員会が地元へのあるいは P T A への真剣な協議がなされていない。説明責任の足りなさ。そこが大きな原因だと思います。河合谷振興会長、河合谷区長会会長、P T A 会長に対し、説明を繰り返したからといって努力したことにはなりません。理解と協力を十分得られるまで、地元住民と保護者の立場にたつて、時間をかけて何度でも説得を重ねるといふ誠意があつてこそ、涙を呑みながらもわかってもらえる場合もあるかもしれません。この小さな町で、今回の住民の直接請求の形となつたこと、そのことは、その説明責任を果たしていないことへの住民の不信感の表れであり、抗議です。

小規模校だからできること、小規模校にしかできないこと。それもメリットではないかと思ひます。それが理想的な教育につながっていくことがあると私は思ひます。それはその人その人の教育的な視点だとおっしゃる方いらっしゃるでしょうが、小さいからといって否定するのではなく、そこからもっと可能性が広がっていくのではないかと、私はそのように受け止めています。

そもそも、河合谷小学校の特別認定校制度というのは前教育長の時に、知恵をだしあい、考えられた制度です。21世紀に入り、今、社会、教育情勢の大きな変化の中、地域や保護者の要望の多様化に対応すべき制度の一つとして、津幡町教育委員会がこの制度を通じて町の教育目標の下、特色ある学校の実現を図ることを趣旨とする。そういう文言から始まっています。

町の教育目標に基づき、特色ある学校の一例を提示する。この事業が地域、学校、家庭の協力・連携を求め、子どもを育てることの意欲的な取り組みとして支援できる。学校多様化の動きの中、通学区域の弾力化の一例とすることができる。このようすばらしい基本的立場でスタートしました。

学校にとっても、地域にとっても、保護者にとっても本当に意義のある制度であるとしています。小規模校だから生まれた制度であり、小規模校のメリットを生かした制度。特認校こそ、これからの子どもたちの教育のために必要とされる学校だと思います。特認校条件のひとつに、この制度についての評価を行い、存続については学校、地域、教育委員会が協議することとなっています。スタートして5年目、存続の協議は行なわれたのか、評価はいつ、どのような内容で評価がなされたのか。一切それは明らかになっていません。

今日、PTAの松本会長が、河合谷地区の人々や自然と一緒に学べる、ほかでは真似のできない特別な学校であると述べていらっしやいました。地区外から通う子どもたちが温かく迎えられ、喜んで通学している。この河合谷小学校の特認校制度というのは大成功しているといえます。今の時代に求められているすばらしい制度を先取りした、すばらしい知恵だと評価されます。今、地元の子どもたちが3人で、あと地域外から通っている子どもたちが多くて、地元の子どもたちがどんどん少なくなったらどうするのか。そういうような声もありましたけれども、地域の学校があるということは、これから若い人たちにとって住める場所、また、魅力ある場所に必ずなっていくはずだと思います。

この間、家に入っておりましたチラシの中に「この学校に来て、明らかに子どもの笑顔が増えました。目の輝きがちがいます。一人ひとりの子どもの存在を認め、その子の持っている力をどんどん引き出してくれる学校です。河合谷の自然環境、小人数での良さ、地域の温かさが、こんなにも生きる力を与えてくれるのだと実感しています。」とありました。これは、先ほど賛成議員が言っていましたように、河合谷の持つ力、その自然、そして本当に一生懸命努力されたその成果だと思います。どこでも特認校がうまくいくかということ、そうではないと思います。通っている保護者の方からは、地元の子どもたちが少ない、他から通う子が多い、その微妙なバランスが、子どもたちにとって居心地のいい環境になっているということを伺いました。

存続か閉校かというのではなくて、そこにもっともっと知恵を働かせればできることがないのか、発想を変える、そういうものがないのか、私は考えていました。そんな中、隣町に住む友人が、10月22日の毎日新聞を内灘町の友人が送ってくれました。私はこれを見て、何か希望がわいてきました。そこには小規模校の再生という見出しで、少子化や過疎化で小中学校の統廃合が全国的に進む中、児童数の少ない小規模校が統廃合の道を選ばず、教育効果をあげようと工夫を凝らしている、そういう記事がありました。閉校か、統廃合か、そういうことではなくて、小さな4つの小学校、岩手県の宮古市というところですよ。ここは、この前に、頑張る地方応援プログラムという総務省の懇談会のことでも紹介しましたが、小学校は地域の拠点である。小学校は絶対になくしてはならないという、そういうことを懇談会に出席している首長さんたちがおっしゃっていました。相当規模が小さくなくても、ギリギリまで残した方がいい、そういう中で、文部科学省の新教育開発プログラムとして委託され、昨年度から始まって四つ葉の学校という合同事業です。津幡町でも小規模校と一緒にあって連携しているということも伺っています。でもこれは、もっと前向き、統廃合とか閉校ではなくて、残すために何かできることはないかという知恵を絞って考えられた、そういうプログラムです。いずれかの4つの学校に集まって、週1回授業を受ける。国語、社会、体育、音楽の4教科に、今年からは算数も加わった。ある小学校から通うただ一人の6年生もいる。いつもは5年生あわせて3人しかいない。合同だと体育でチーム戦もできるし、いろんなことができる、またそれはそれで楽しい。そういう小規模校の再生という考え方です。

学校をなくすという方向ではなくて、どうやったらなくさない方向へいけるかということ、もう一度みんなでお考えませんか。この間、いしかわ県民教育文化センター所長の金森俊朗先生が北陸中日新聞に書いていらっしゃった文を、もうお読みになった方もいらっしゃるかと思いますが、聞いていただきたいと思えます。「『小』を守る大人の生き様」というタイトルで、学生の頃、大学の恩師が日本教育史の特筆すべき学校として、何度も強調していた学校、全村の禁酒によって学校を建設したという前代未聞の、日本教育史上輝かしい快挙を成し遂げた学校として、村人の思いと歴史は無形文化財に匹敵するとして、河合谷小学校の存続を願って寄稿された文です。大きいとか多いことのみが教育にとって最大の価値ではないことは誰にも分かることだと述べておられます。そして、

廃校はいつでも誰でもできます。すべての人の相談と英知を結集してこれまで以上に豊かな学校と地域にする姿こそ子どもに誇ってみせたいものです。今、子どもに最も持たせたいのは、「どうせ頑張っても無理や」という諦め、絶望ではなく、努力したら変えることができるという希望です。講演で訪れた沖縄と北海道の小さな村と町の行政者や青年たちは、「小」であることの良さを引き出し、この町に育ったことを誇れるようにしようと懸命でした。津幡町が小さいがでっかい価値を持つ地

域と学校を守って大切にすることを強く願っています。と結ばれています。

今わたしたちが真剣に考えなくてはならないのは、子どもたちのこと。現に通学している子どもたちがいる、喜んで通っている子どもたちがいます。その子どもたちは勿論、津幡町のすべての子どもたちにとって最も幸せな教育は何かです。競い合うことでしょうか。切磋琢磨することでしょうか。小さなところでも切磋琢磨はできます。今、私たち大人が子どもたちのためにできることは何でしょうか。少子化や過疎化の問題は津幡町全体の問題です。この河合谷の問題がゆくゆくは自分たちの地域の問題になるわけです。

急いで、閉校にする理由はないのではないか。1年でも、2年でも、話し合う中でみんなで知恵を出し合って、さきほどのプログラムよりも、もっともっとすばらしい考え方を出し合って、本当に津幡町を希望の持てる町、誇れる町として、全国に発信するというそういう方法を必ずみんなで見つけ出せるのではないかと思います。

この問題の責任はどこにあるか。誰が悪いか。地域と地域が対決し合ったり、政治的な考え方が違うとかどうだとか、もうそんなことは別のことではないでしょうか。今なくしてしまったら、ほんとうに悔やまれることです。どうぞ、子どもたちのために、もう一度一緒に考えていただきたいと思います。せめて1年でも2年でも凍結という考え方の中で、知恵を出し合う努力をしていただきたいと心から思います。心からお願いして私の討論といたします。聞いてくださってありがとうございます。